

青梅市文化財ニュース

第337号

平成27年11月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684 Tel.0428-23-6859）

ぼうくうかんししょう 防空監視哨

今年のアジア太平洋戦争後 70 年の年です。御岳山の犬塚山と、永山丘陵の秋葉山（第 2 休憩所）は、現在は登山やハイキングを楽しむコースになっていますが、戦時中には防空監視哨が設置されていました。

防空監視哨は、昭和 12 年防空法制定後、本土空襲に備えて日本各地に設けられた、目視による対空監視施設です。主に 10 代後半の青年達が、敵機をいち早く発見して防衛司令官に報告し、空襲警報発令や防空部隊出動準備をさせるため、24 時間体制で見張りしました。

1. 御岳山大塚山の御岳防空監視哨（『郷土研究 21 号』（奥多摩郷土研究会）より要約抜粋）

昭和 15 年、山頂付近に木造 2 階建ての監視哨舎が開設されました。当時の犬塚山はカヤトの原で見晴らしが良く、冬は東京方面のみならず江ノ島まで見通せました。

哨舎 1 階は 3 畳の食堂、4 畳半の寝室、壺を便器とした便所で、2 階は電話が在る通信室、2 階から 3m ほど梯子段で登ると 2 畳ほどの望楼がありました。望楼から双眼鏡で監視しますが、吹きさらしのため雨天時はレインコート様の物を、冬は防寒着を着用しました。時には腰までの積雪があるなど、今より寒さが厳しいなかでの業務でした。電気は引かれていましたが、夜は懐中電灯を明かりとしました。哨舎近くには聴音用の縦穴が掘られており、その中ではよく音が聞こえました。爆音を聴くと、爆音量・進行方向・高度・機種などを八王子の監視隊本部に、第 1 報で「甲監視哨南西爆音少ナシ東」、第 2 報で詳細に「甲訂正敵四発東」などと、直通電話で報告しました。進行方向は爆音から大体分かり、飛行機の形と機種名は、絵で覚えさせられていました。

三田村と吉野村から各 20 余名ずつ計 40 余名が派遣され、哨長 1 人、哨員はおよそ 6 班に分けられました。午後 4 時から翌日の午後 4 時までの業務でした。

炊事は交代制で、水は富士峰から樽で背負って運び、食料と炭は通勤時に御岳の武田商店で購入し持参しました。

昭和 17 年 7 月 1 日、皇室は戦時下民情視察として侍従を派遣し各所を巡回させる中、小出侍従が三田村に来村、御岳防空監視哨を視察し激励しました。

しかし、昭和 20 年 8 月 2 日の八王子空襲で、監視隊本部の電話が壊れ連絡不能となっしまい、それ以降、御岳防空監視哨には行かなくなりました。



小出侍従が御岳防空監視哨を視察した際の写真（『郷土研究 21 号』より転載）

2. 永山丘陵・秋葉山の防空監視哨

勝沼青年団より選出され、昭和 19 年 12 月 20 日の応召まで約 3 年間、哨員であった大正 14(1925)年生れの方に伺いました。90 歳となり、記憶は曖昧な所もあるという事です。

「現在はハイキングコースの第 2 休憩所として^{あずまや}四阿が建っている辺りに、2 階建ての哨舎が建設されていた。当時は好天であれば都内まで見通せた。総勢は 50 人ほどで、7 班体制であった。勤務に就く時は、青梅警察署長に挨拶してから山に登った。屋根の上から望遠鏡で監視し、電話で八王子へ連絡した。B29 など数種類の機体を識別するための写真が掲載された参考書類があった。1 階は、囲炉裏があり飯盒で御飯を炊き、また就寝の場所であった。競技会に代表として出席し、模型機を見て機種を競ったこともあった。」

上記、御岳山大塚山の防空監視哨と青梅秋葉山の防空監視哨については、三田村（昭和 16 年）・吉野村（昭和 19 年）・青梅町（昭和 15 年）の「事務報告書」にも、「防空事情」として記載されています。（『増補改訂 青梅市史』（下巻））

付記

岡山県牛窓の監視哨では、敵機の機種を聞き分ける訓練用に、3 枚の 78 回転 SP レコードが使われたといひます。「千葉陸軍防空学校監修 防衛総司令部・陸軍航空本部推薦の敵機爆音集、川崎日蓄工業株式会社製造」のレコードでした。哨員は、ロッキード・ハドソン重爆撃機の高度千米・三千米・五千米の音、ボーイング B17D の高度千米・三千米・五千米の音を、何度も何度も繰り返し聴いて、どの方向から来襲しても聞き分けられるように覚えたという事でした（テレビ番組「遠くへ行きたい」）。

参考文献

伊藤 広光（2010）御岳防空監視哨について、『郷土研究 21 号』. 1～6.（奥多摩郷土研究会）

青梅市史編さん委員会(1995) 防空事情. 『増補改訂 青梅市史』（下巻）. 192～196.

（文責 三好ゆき江）